

生物多様性 6 月フォーラム

「改めて生物多様性の価値を考える／西三河、矢作川流域での活動と目的は？」

【会場と現地視察概要】

2015 年(H27 年)6 月 6 日(土)13:00～17:00

明治用水会館



情報提供 1：愛知教育大学 渡邊教授



分子系統学(植物)の立場から植物生態系の健全な状態判断を行っている。

愛知万博以後、植物分類はそれまでの形状分類から遺伝データによる分類に代わり遺伝的価値により評価・判断されている。

生物多様性の価値指標はお金、満足感、次世代への引継ぎができた達成感などいろいろであるが漠然としている。フォーラムではディスカッションしながら進める形としたい。

生物多様性は高校教科書では「個性とつながり」としている。漠然とした表現だ。「人間が他の生物を思いやる」ことが生物多様性保全だといいたい。

具体的な方法として

周辺に存在する種を調査し、その種について遺伝子の進化解析を行いデータを総合して地域の生物多様性保全策を検討することになる。

しかし、現時点では保全目標の設定のために必要な植物の分布データがないため、保全目標の検討ができない状況だ。

生物種調査は大変だがアマチュアも参加できる。遺伝子解析はプロの領域。愛知県（全国も同様だが）はレッドデータブックはあるが、基になるべき生物種の分布データがない。身近な生物調査をまずやりましょう。

調査は一般市民・NPOが先行して欲しい。全ての種を調査するのは無理なので在来種の中から調査対象種をH27年度中に提案するのでH28に500mメッシュで調査したい。

データがまとまれば、地域自然遺産として観光資源化しようとか、保全対象生物の専門人材の育成につなげようなど使い方も考えることができる。その先に植物と動物との関係などの検討が可能になる。今の所、全国でも例がない調査になるが得られたデータは地域の価値・財産となる。

今のところ聞いている範囲では、刈谷市・岡崎市は調査に協力姿勢をみせている。グラウンドワークなどNPOや市民の協力をぜひ検討して欲しい。

情報提供2：愛知県自然環境課 来住南課長補佐



平成27年度の愛知県の取組を紹介。



図の様な取り組みを行っている。

生態系ネットワークについては本年度は西三河南部での組織を立ち上げたいと考えている。残すのは尾張南部（名古屋市、一宮市など）ひとつとなりH28年度に立上げたい。

県としてはネットワーク協議会活動を支援していくほか、あいちミチゲーション計画に基づき開発行為に対して指導を継続する。

生態系ネットワーク形成の県内展開

多様な主体の協働により生態系ネットワークの形成を目指す。



本年度は表のような活動が計画されている。

H27年度 活動予定

ビोटープ整備	フォーラム	その他
【知多半島】 日本福祉大 大同特殊鋼 【東部丘陵】 愛知学泉大学(計画)	【渥美半島】 7月 【東三河】 11月 【東部丘陵】 11月 【新城設楽】 11月 【知多半島】 1月	【知多半島】 生きものの通り道整備に向けたワークショップ 企業緑地の公開 8月 学生による保全活動とフリーマガジンの発行 【西三河】 地域在来種の苗木の育成・配布スキームづくり 【東三河】 生態系バスツアー 8月 【新城設楽】 植樹体験ツアー 10月
生物多様性自治体ネットワークフォーラム 9月4日(金) 愛知県芸術文化センター 12階 アートスペース		

17

会場からの指摘・要望

1. 特定外来生物駆除マニュアルを現場、市町に示してほしい。ミシシッピカメの殺処分(冷凍させるらしい)処理など県が指導してほしい。
2. ネットワークは共通課題がなく、何をやっていくのか分からないのではないかと。県の指導性が必要。

会場での意見・提案

1. については例えば冷凍庫のありかなど地方情報は県では把握できない。市町ごとに状況に合わせて方針を作るべき。そのとき必要なのが基礎調査データ。データに基づき処理方針を行政、NPO、企業で連携して考えたらどうか。

2. について 2010 年での目標達成のため、県はネットワークをもっと指導すべきではないか。

榎前環境保護会現場見学

会長の加藤さんに案内していただきました。もともとは自治会活性化のために子供と魚観察を行うために始めた水田魚道だそうです。平成 19 年に環境保全会を立ち上げ、月に一度早朝に子供たちと魚の定期調査を継続しているそうです。

もっとも採取した魚は水路に返すのが原則。子供の前で魚を殺して食べたりするのは教育上よくないとお考えでした。

??榎前ってどのあたり??

右上のチェックが会場の明治用水会館。左下のチェックが現場。大体わかりますね。現地を見に行きたい方は参考にしてください。

このあたりの灌漑用水はパイプライン化されているので水路は全て排水路。流末はあの「油が淵」に流れていますので、油が淵の魚類が遡上してくるようになります。



魚のメインはドジョウで 6~7 月に活動が活発になるとのこと。



この地区の水路では水田魚道が当たり前につけられている。



下の写真のような垂直型の水路の場合、タンボから落ちたカエルは再びタンボに帰るのは難しいのだそうで、魚道勾配を緩くしたカエル向け改良型魚道が設

けられていた。



現場の後は例によって交流会。フォーラム講師の渡邊教授、來住南補佐を含め25名くらいでガヤガヤ。交流会のみ参加の人もいたりして締め後も残るメンバーもいました。

